

個人種目における運動有能感を高める指導方略の検討

一小学校3年生のマット運動単元を取り上げて一

倉島明日香（群馬大学）

1. 緒言

運動を継続的に行うためには運動に対する内発的動機づけが必要であり、内発的に動機づけられるためには運動有能感を高めることが重要である（岡沢ら、1996）。運動有能感を体育の授業を通して高めるために、鬼澤ら（2022）は「運動有能感を高める指導方略」を集団種目で提案し有効性を明らかにしたが、個人種目は検討されていない。そこで本研究では個人種目のマット運動を取り上げ、鬼澤ら（2022）の運動有能感を高める指導方略の適用を通して運動有能感を向上するのかを検討することを目的とした。

2. 研究方法

1) 期日と対象

2024年10月30日～11月19日に群馬県F小学校3年1・2組を対象にマット運動単元を行った。

2) 運動有能感を高める指導方略と単元計画

鬼澤ら（2022）の運動有能感を高める指導方略は3つの手立て：①教材の工夫、②豊かな仲間との関わり、③教師による働きかけで構成されている。このうち、①の「運動が苦手な児童でも楽しめる運動課題の設定」を「個人技能に応じた目標設定」に変更した。

1	2	3	4
オリエンテーション 試しの運動	前転・後転のポイント見つけ 前転の課題別練習	後転の課題別練習	側方倒立回転・ 壁倒立のポイント見つけ
5	6	7	
側方倒立回転の 課題別練習	壁倒立の課題別練習	成果発表会	

図1 単元計画

3) 調査方法

(1)運動有能感調査（岡沢ら、1996）：単元前後に3因子9項目を実施した。単元前の得点順で50%を基準に上位群と下位群に分けた。

(2)動作分析（藤井、2003）：単元1時間目（その技を初めて取り上げた）と7時間目に前転、後転、側方倒立回転、壁倒立を撮影し動画をもとに分析した。

3. 結果と考察

(1)クラス全体の運動有能感をみると、有能感合計及び統制感において単元前に比べて単元後に有意に向上した。また、群間（上位群・下位群）と単元前後の二要因分散分析の結果、有能感合計および3つの因子いずれも有意な交互作用がみられた。次に単元前後の単純主効果の結果、下位群のみ、単元前に比べて単元後に有意に向上した。したがって本単元での学習によって、下位群は単元後に有意に向上することが明らかになった。一方、上位群は単元前から高く、単元後においても変化しなかった。

(2)クラス全体で技の得点の変容をみると、いずれも単元前に比べて単元後に有意に向上した。また、群間（上位群・下位群）と単元前後の二要因分散分析の結果、交互作用はみられなかった。しかし、群間、単元前後の主効果は有意であった。

授業の様子をみると、スモールステップによる練習方法の提示や教材・場の設定の工夫をすることで、児童一人ひとりが自分の技能レベルに応じた練習を行っていた。また、教え合いをしているペア・グループに対して教師が価値化することで、グループ活動が活発になっていった。その結果、技能が向上し、運動有能感が高まったと考えられる。

4. 結論

これらにより、本研究で適用した運動有能感を高める指導方略は個人種目のマット運動単元にも有効であったといえる。

5. 主な引用文献

鬼澤陽子ほか（2022）小学校低学年の体育授業における運動有能感を高める指導方略の有効性の検討. スポーツ教育学研究, 42(2) : 19 - 31.
スポーツ庁（2022）令和5年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査, p52, 56.